【A 本校の求める子ども像・学園の一貫教育についてに関してのご質問】

Q1：御校にはどういう性格のお子様が向いていますでしょうか。行動観察ではどういうお子様が合格している傾向にあるか等はありますでしょうか。

Q２:協調性が無いタイプの子は本校では受け入れて頂けないのでしょうか。

Q1、２への答え：答え：本校には、おとなしい子、積極的な子、慎重な子など、さまざまな性格の児童が在籍しています。そうした中でも、共通して見られるのは「子どもらしい素直さを持つ子」が多いということです。自分がまわりの大人から大切にされているという安心感の中で育ち、情緒的に安定していることは、児童期の成長において大切にしたい視点だと考えています。入学試験に臨まれるにあたっては、「自分の思っていることや伝えたいことを、自分の言葉で伝えられる子」「自分の身のまわりのことを年齢相応にできる子」であることを重視しています。つまり、年齢に応じた“自律”が育っているかどうかが大切です。また、「協調性」についてのご質問ですが、入学試験という緊張する場面で、初めて会う子どもたちとグループ活動を円滑に行うのは、大人でも難しいことです。小さなお子さんにとって、「協力したい」「みんなとやってみたい」と思っていても、それを行動に移すには大きな勇気が必要です。そこで本校では、入学試験の行動観察において、場の雰囲気が和らぐようアイスブレイク的なゲーム性のある活動を取り入れ、楽しみながら自然にグループ活動ができるよう工夫しています。毎年、試験が終わって教室を出てくるお子さんたちは、皆「楽しかった！」と笑顔で帰っていきます。本校の入学試験時間が比較的長めに設定されているのも、子どもたちがのびのびと活動する中でこそ見えてくる「その子本来の良さ」に出会いたいという思いがあるからです。

Q３:御校に入られてから、その中でも特に伸びている（成長している）子の特徴をご教示ください。

Q４:６年後、12年後のこども達の成長された具体的なエピソードを教えて頂けましたら幸いです。

Q５:成長の過程（年齢や性別）で一貫教育校として、それぞれのステージで期待したいことや応じたプログラムなどお聞かせください。

Q3～５までへの答え：本校に入学した子どもたちは皆、机上の学習だけでなく、多様な体験にあふれた学校生活を送りながら、それぞれの歩みで大きく成長していきます。教科学習において特に「伸びしろが大きい」と感じるのは、知識を覚えることにとどまらず、自らの好奇心から体験と結びつけて考えたり、さらに調べたりして、学びを深めていくことができる子どもたちです。たとえば初等部を卒業した12年後、高校3年生になった子どもたちの多くが、進路や進学について自分の意志で判断し、自分らしい道を見つけて進んでいる様子を見ると、幼少期からの積み重ねの大切さを改めて感じます。中高では学年規模が比較的小さく、一人ひとりに目が行き届く環境の中で、きめ細かな進路・進学指導を実施しています。その結果として、難関大学への進学にとどまらず、音楽・美術など専門性の高い分野や海外の大学への進学、さらには理系分野への進学者が多いなど、多様な進路選択が可能になっています。本学園では、「人徳を備え、自らの力で人生を切り拓き、社会や世界の力となる人材の育成」を教育理念として掲げており、幼稚園から大学までの一貫教育を通して、4つのステージでその理念を具現化しています。特に初等部では、「人」としての基礎づくりに重点を置いています。「善悪の判断」「自分の心と身体を大切にすること」「自ら進んで行動する力」などを育てるために、机上の学びだけでなく、自然の中での遊びや、感性を刺激する体験を数多く取り入れています。「美しいものを美しいと感じる感性」や「豊かな好奇心」「しなやかな心」を、体験的な学びを通じて育んでいます。その一例が宿泊行事です。林間学校などの宿泊体験は、「人間形成」を大切にする本校の方針を体現するプログラムであり、卒業までに延べ20泊26日を行っています。単に「楽しかった思い出」だけに終わらせるのではなく、友達との関わりの中で「気になるところ」「良いところ」の両方を認め合い、共に生活をつくり上げる経験が、自他理解や心の柔軟性、他者への思いやりといった“社会で生きる力”の基礎になります。保護者から離れ、友達と協力して生活を送る中で、食事や身支度をはじめとした生活面の自立・自律も自然と身についていきます。こうした経験は、現代社会において育ちにくくなっている「心の適応力」を、発達段階に応じて育てる貴重な機会にもなっています。実際に、本学園を卒業した子どもたちは、成人後も仲間とのつながりを大切にしており、交流が続いている例が多く見られます。こうしたつながりは、本当の意味で「心の底で気持ちがつながっている」ことの証であると感じています。

【B　教育活動の特色についてのご質問】

Q６:様々な特色あるカリキュラムは、どのようにヒントを得て、考案、作成されていますか。

答え：特色ある様々なカリキュラムは、今までの教育活動の蓄積の中から導き出され、淘汰され進化してきたものです。また現在の社会情勢や10年、20年先の社会を見据えて、日々研究し、新たな取り組みをチャレンジし、カリキュラムに取り入れています。

Q７:3つの柱としてランゲージ・アーツ（言語技術）を掲げられていますが、実際には1年生では年間のうち何時間程度授業が行われるのでしょうか。また、その授業を行うことで、日常生活へ良い影響が現れているなどありましたら教えて頂けますでしょうか。

答え：ランゲージ・アーツの授業は、1・2年生では年間9時間、3年生以上では年間6時間実施しています。授業では、絵本の読み聞かせから始まり、聞き取った物語を再現する活動などを通じて、“ことば”の使い方や意味についての理解を深めていきます。正しい知識を身につけることで、文章を読み取る力や、自分の思いを言葉で表現するスキルを少しずつ育てていきます。高学年になると、他教科でも子どもたちの“書く力”や“伝える力”の伸びを実感する場面が多く見られます。中等部でもランゲージ・アーツの授業は継続しており、大学受験時の小論文においても、しっかりと自分の考えを文章で表現できる力につながっていて、小論文作成も苦にしない人が多くなっていると聞いています。

Q８:高学年の算数は、中学数学を先取りしたりしますでしょうか？

答え：本校では、教科書にとらわれずに内容を広げたり深めたりすることを大切にしていますが、中学校の内容を“先取り”する授業は行っていません。高学年の算数では、ひとつの問題を多角的に捉え、さまざまな考え方や解き方を通して思考力を育てる授業を重視しています。公式に頼るだけでなく、自らの手で解き進めていく力を養うことを目指しています。

Q9:英語教育について時間数、先生、カリキュラムの内容について教えてください。オーストラリアのホームステイではどのくらいの費用がかかりますか？

答え：英語は低学年は週１時間、3年生以上は週２時間です。4年生からはクラスを２つに分ける二分割授業をおこなっています。指導者はイギリスの公的文化交流機関であるBritish councilより2名のネイティブの講師を招聘し、2024年度より初等部の日本人英語専任教諭を加えて3名体制です。森村オリジナルのカリキュラムで行っています。海外の文化に触れながら楽しく英語を学ぶ中で、綴りと発音の関係性(phonics)を大切に、４つの技能(reading・writing・ hearing・speaking)の習得をバランスよく促します。British　councilの教材開発力、教員の質の高さは全世界で定評があります。何より英語が好きになるようこと、英語をもっと学びたいという気持ちを大切にしています。オーストラリアの語学研修の費用は今年度約59万円です。

Q10:英語、算数は４年生から２クラス分割のようですが、成績順なのでしょうか？

答え：英語に関しては単純にクラスを二分割しています。算数については、単元、学年の状況によって変わります。英語の同じように単純に出席番号等で分けることが多くなってきていますが、関連のある既習単元の習熟度によって分けることもありますし、希望によって基礎をじっくり身につけたい小クラス(10名前後)と、議論などを通して課題をさらに深めていく大クラス(30名前後)に分かれる場合もあります。

Q11：補習のようなサポートはありますか？

答え：３年生から週１日、希望者に放課後の時間を使って学習会をおこなっています。また、休み時間に質問にくる児童もいますので、丁寧に納得がいくまで導きます。夏休みに1，2年生の希望者に英語プログラムを行っています。

Q12：幼稚園生や中高生との交流はどれくらいありますでしょうか？

答え：校種間の交流も行なっています。たとえば、1年生は森村幼稚園の年長児（藤組）との交流を定期的に行っており、自分たちで考えた出し物を披露したり、校内を案内したりする活動を通して、年下の子と関わる機会を持っています。少子化の進む現代では、年齢の異なる子どもと関わる経験自体が貴重になってきており、こうした活動は“相手の立場に立って考える力”や“自律の心”を育むことにつながっています。また、幼稚園との交流にとどまらず、初等部内でも縦割り活動を積極的に取り入れており、学年を越えて支え合う関係が自然と生まれています。中高等部とのつながりについては、初等部児童を対象に、中高等部の本格的な部活体験ができる「中高オープンスクール」、初等部生親子を中高生が案内して中高生の学校生活を伝える「体験DAY」を行っています。6年生には中高等部の図書館体験があり、より専門的な蔵書のある図書館を通じて次のステージを意識する機会を設けています。

【C 家庭学習についてのご質問】

Q13：長期休暇である夏休み、または普段はどの様な宿題の量や内容イメージですかか？

答え：夏休みの一律の宿題は必要最小限の量を目指しています。自由研究、制作などは一切求めていません。全員に同じ内容、同じ量を課す宿題から、必要な内容、適切な量を、できれば自主的に設定するという自学スタイルに学年が進むにつれて変化していきます。普段の宿題については、繰り返しの練習が必要なひらがな、漢字などが出されていますが、一律に提出を求めるものは減ってきています。

【D 卒業後の進路・内部進学についてのご質問】

Q14：内部進学以外の方の割合や進学先を教えていただきたいです。

Q15：併設中学の外部生との学力の差を埋めるためのカリキュラムの工夫（中学受験カリキュラムの取入れなど）はございますか？

Q14,15への答え：内部進学については、年度によって若干の差はあるものの、例年およそ80～90％の児童が森村学園中等部へ進学しています。なお、内部進学に関して特定の定員が設けられているわけではありません。一方で、外部の中学校を受験し進学する児童も一定数おり、進学先は難関中学校をはじめ、スポーツに特化した学校や、公立中学校などさまざまです。ただし、外部の中学校を受験する場合は、内部進学との併願はできません。中等部からの入学者と内部進学者の“学力差”についてですが、入試を通じて入学する外部生は、制限時間内に正確に解答する訓練を積んでいるため、中学入学当初のテストでは得点力に違いが見られることがあります。しかし、初等部の児童は、納得できるまでじっくり学ぶ経験を重ね、課題に向き合う姿勢が育っているため、中等部に進学してからの学びの中でその力が発揮され、1年も経たないうちに差は自然と解消されていきます。また、中学受験を経て入学した外部生にとって“入学がゴール”になりがちな一方で、内部進学者は初等部時代から“学びを続ける”ことが当たり前となっており、中学でも日常的に学習に取り組む姿が多く見られます。実際に、近年の東京大学や京都大学の合格者の中にも初等部出身の生徒が含まれています。なお、本校では中学受験のための特別なカリキュラムは設けていません。中学受験は“どれだけ正確に早く解答するか”が問われがちですが、本校では「知識をどう活用するか」「正解はひとつか、それ以外の導き方はないか」といった、思考力や応用力を重視した授業を行っています。ただし、6年生になると、中等部への進学意識を高める目的で、森村学園中等部の過去の入試問題を活用して様々な考え方を伝え合う授業も行っています。入試問題の中には、小学校での学びを総合的に問う発展的な内容も含まれますが、得点差をつけるために作問されていることもあり、中学以降には直接つながらない部分もあることをお伝えしています。

【E 放課後の過ごし方・学童について】

Q16：提携していらっしゃる学童はありますか。また、長津田からの通学は子どもの足では遠いでしょうか。

Q17：共働きのご家庭のお子さんは、学校終了後の学童はどの辺りに行かれてるのか、また、習い事など含めどのように過ごされている方が多いか、傾向を教えていただけると幸いです。

Q18：５年生からクラブ活動がありますが、１～４年生は放課後どのように過ごしていますか？森村の森はどのような時間帯に利用できるのでしょうか？

Q19：民間学童への立寄可否について。

Q20：低学年の放課後遊びはいつぐらいから利用できるのか。

Q16～20への答え：現在、本校では共働きのご家庭が増えており、学年によってはクラスの７割ほどのお母様が仕事を持たれています。併設の学童保育施設はありませんが、多くのご家庭では、それぞれの生活スタイルに合わせて、民間の学童保育を活用されています。主に『自宅の近く』や『保護者の勤務先に近い場所』の施設が選ばれており、つくし野駅まで送迎バスのある学童もあります。時間やプログラム、食事など、内容の充実した施設も多く見られます。悪天候や緊急時には、可能な限り早く安全にご自宅に帰れるよう、学校としても配慮しています。放課後の過ごし方については、1・2年生は14時50分まで放課後遊びの時間があり、学校に残って活動する子も多くいます。3年生は通常15時30分まで、4年生以上は15時40分頃まで学校で過ごすことが可能です。子どもたちは校庭や中庭、図書室、学園の森など、思い思いの場所でのびのびと遊びながら放課後を楽しんでいます。森遊びについては、1・2年生は教員と一緒に活動しますが、3年生以上になると、休み時間なども含めて自由に森で過ごすことができるようになります。なお、長津田駅からの徒歩通学については、駅周辺にお住まいのご家庭を除き、初等部児童には許可しておりません。これは、長津田駅から学園までの通学路にガードレールがなく、交通量が多いため、安全確保の観点からの判断です（中高生は徒歩通学可）。

【F 学校生活に関するその他のご質問について】

Q21：スマホや携帯、ＧＰＳの携行はＯＫでしょうか

答え：現在、本校ではKIDS携帯やGPS機能付き端末の所持を、届出制により許可しています。使用にあたっては、機種名などを記載した書類を提出していただく形をとっています。また、ご希望のご家庭には、校門通過情報を保護者の方に通知する専用端末の貸し出しも行っており、安心して登下校していただける体制を整えています。

Q22：制服のまま習い事や塾に行くことは許可されていますか

答え：制服のまま習い事や塾に行くこと（※学童保育を除く）については、学校としては原則認めておりません。ただし、やむを得ない事情がある場合には、保護者の責任のもとで対応をお願いしています。特に、夕方以降に児童がひとりで移動するケースについては、安全面への配慮からも十分にご検討いただきたく存じます。通学時と同様に、公共の場では制服が本校の児童であることを示すものでもありますので、マナーや安全に十分ご留意の上、慎重なご判断をお願いしております。

Q23：親の来校頻度はどの程度でしょうか

答え：学年懇談会をはじめとして学級懇談会が年に3～4回、面談は年に2～3回程度行います。参観日は年間５回設定(出欠確認はありません)し、その中で都合の良い時間に参観できるように配慮しています。主な行事についてはなるべく休日に行うなど、お子様の成長をご家族の方に見届けていただけるようにしています。(音楽会のみ平日の午後)

Q24：４月入学時の集団登下校について。

答え：集団登下校は実施しておりません。登下校の最寄り駅または方面別にグルーピングしており、年２回顔合わせの時間があります。通学時、駅ごとに電車の乗車車両が決められていますので、同じ駅を利用している子どもたちどうしはお互いがわかるようになっています。1、2年生は下校時に担任と担任助手がつくし野駅ホームまで毎日見送りに行き、乗車を見届けます。

Q25：送迎について決まりはありますか。車・タクシー送迎の可否なども知りたいです。

答え：入学後、10日間の送迎をお願いします。その後は一人で通うことになりますが、子どもによって乗り換え回数が多かったり、遠方から通っていたりそれぞれ事情が異なります。送迎の終わりは、それぞれのご家庭でご判断ください。なお、登下校は社会性、マナーの面で大切な学びの機会と考えていますので、車、タクシーでの送迎は認めていません。

Q26：朝の始業前の時間に外遊びはできますか？

答え：制服から体操服に着替え、提出物や始業準備等の朝の支度が済んだ人から遊べます。

Q27：一年生の生徒さんは登校時最寄駅に何時ごろに到着されていますか？

答え：下校と異なり、全学年の登校時間が一定の時間に集中するため、安全上の観点から詳細な時間についてホームページ上ではお伝えできません。今後に行われる私学フェアや学校説明会等で直接教職員におたずねください。

Q28：学園内にいじめが発生する場合の対応の仕方を教えて頂けると幸いです。

答え：「いじめ」は、現行の『いじめ防止対策推進法』において、児童が「心身の苦痛を感じているもの」と定義されており、かつてよりもその対象範囲は広がっています。つまり、どの学校においても、いじめの芽は大小を問わず存在し得るという認識をもつことが大切です。本校では、この認識のもと、日常の教育活動の中で「いじめが起きにくい集団づくり」を常に意識し、万が一の場合には迅速かつ組織的に対応できる体制を整えています。具体的には、スクールカウンセラーを含む「いじめ対応委員会」を設置し、児童の様子や人間関係に関する情報を教員間で共有しています。専科制を採用している本校では、一人の児童に複数の教員が関わるため、さまざまな視点から子どもの変化や小さなサインを捉えることが可能です。日々の学校生活では、子どもの自己肯定感を育む声かけや温かいまなざし、励ましを大切にし、子どもと教員との関係が信頼に満ちたものとなるよう心がけています。子どもたちが安心して、感じていることや困りごとを素直に伝えられる環境づくりを目指しています。さらに、本校のスクールカウンセラーは、児童の小さな悩みごとはもちろん、保護者の方の育児相談にも対応しています。全校児童を対象に、年に3回「いじめに関するアンケート」を実施しているほか、「メンタルボックス（相談箱）」を設置し、いつでも自由に困りごとを発信できる仕組みも整えています。加えて、3年生以上の各クラスには、専科教員を「サポート教員」として配置し、担任と連携しながら子どもたちの心の変化や日常の様子をきめ細かく見守っています。

Q29：災害時にはどのような対応をされていますか？

答え：本校では、地震などの災害時に備えた安全対策を整えています。校舎は耐震補強工事を済ませており、安全性を確保しています。非常時に備えて、児童一人につき3日分の食料を備蓄しているほか、学校全体としても災害用設備を充実させています。非常用電源や、プールの水を飲料水に変換できる装置なども備え、万が一の事態にも対応できる体制を整えています。また、地震・火災をはじめとした各種防災訓練を定期的に実施し、教職員は日頃から子どもたちの安全確保に努めています。保護者の皆さまへの連絡手段としては、通常より使用しているメール配信システム『ミマモルメ』を通じて、災害時にも迅速かつ正確な情報提供を行えるようにしています。

Q30：都内からの通学実績や都内からの通学児童の放課後の過ごし方を伺いたいです

答え：全校児童の約25％は都内23区からの通学者です。交通インフラの発達によって、都内からの所要時間がこの十数年で格段に短くなっていることも理由の一つなのでしょう。放課後は、各ご家庭の方針にもよりますが、下校時刻ギリギリまで「放課後遊び」の時間を楽しみにしている児童も多くいます。学校ではお友だちとたくさん遊んで、帰宅したら習い事や宿題、お家のお手伝いをする、というようにメリハリのある時間の使い方をしている児童が多いと思います。

【G 入学試験に関するご質問】

Q31：入学試験における生まれ月への配慮はありますか

答え：願書を締め切り後、誕生日順(遅く生まれた人が先)に並べ直し、受験番号を振ります。試験当日、同じグループの子どもたちは、月齢にあまり差がない集団となります。